なわてんと故大森一樹監督

厳寒の2月、大阪電気通信大学四條畷キャンパスに山の冷気を圧する熱気が満ちている。「なわてん」は、四條畷の「なわて」と展覧会の「てん」の略称で、名付け親は昨年末、急逝された大森一樹映画監督だ。

2000年4月にテクノロジーとアートの新分野として最新のデジタル機器を備えて開設された総合情報学部メディア情報文化学科は、工学系とアート系の教員を配置し、そのリーダーとして大森監督が教授に就任され、工学系の大学に新たな風を吹き込んだ。そして、縁あって、大森教授の第一期卒業生をAGORA編集部にインターンシップ生として受け入れることになった。今は懐かしい思い出である。思えば、私どもを信用していただき、大切な教え子をお預かりし、監督との社会的立場を超越したフランクな交流をさせて頂いたことに感謝あるのみ。時には、AGORA編集室に男子学生を招じる時はドアを開けておくこと。軽口の冗談にぴしりと真面目な対応で返されたことなど、ラフな口調からは想像できない品性の高さに感服。自らの言動を恥じたことも。

ある日、編集室近くで大森監督とばったり遭遇し、「なわてんの広告を出して」と声をかけられた経緯から電通大はぐっと身近になり、AGORA賞の創設に至ったのも「なわてん」との不思議なご縁の契機となった。

老婆心ながら学生たちの就職率を懸念もしたが、毎年、「なわてん」審査に関わり見聞し、不安が払拭された。年々、デジタルアート、アニメーション、ゲーム、メディアコンピュータ、ロボット、映画、音楽、医療…etcと、多岐にわたるジャンルの卒業制作に限りない刺激を受ける。ITと融合し専門分野の研鑽を積み、未熟を凌駕する学生たち。若者たちの未来への飛翔を想像できる「なわてん」の今後はますます期待が持てる。

亡き大森監督のおおらかな笑顔と豪快な声。今も目と耳に残る。四條畷の空から若者たちを応援している。と、そう確信している。(安)